

構図と言う言葉

（中載）
この「野筆」の中に（12）

雑文といえども、どこかに一つか二つキラリと光るものがなければならない。キラリと光るものは何かというと読者が今まで、まったく気づかなかったもの、気づいても意識の表に判然としなかったものなどである。以下の文に幾つ読者から見てこれがあるか。

「構図」は翻訳語である（新潮国語辞典）。英語の「composition」は「compose」からきていて、「構成する」「文を作る」「詩歌を詠む」などの意味がある。したがって「composition」には「構成」「作文」「作曲」「文章」「構図」などの意が生まれた（斎藤秀三郎・英和中辞典）。私は勝手に「本を読む」を付け加えた。

（読者）
（して）
画を描く時の構図や小説や作曲の構図については省略するが、短歌の構図と読書の構図について書いてみたい。

ふゆふかみひかりたゆたふ卓上に黒電話機と一房のパナナ

一点の静物画が、目の前に現れるではないか。平仮名と漢字の並びかたは、正に淡彩画である。画面に残した白と電話機の黒とパナナの黄色が眼に見えるようである。しかも、ここでは黄色を塗っていない。彩色しないでも黄色に見えるというのも、淡彩画の手法の一つである。これは、真物の歌人である玉城徹の歌集＜香貫＞の中にある。また、斎藤茂吉の歌集＜白き山＞の中に、

（さか）
最上川逆白波のたつまでにふぶくゆうべとなりけるかも

という一首があるが、この漢字と平仮名の構成も見事である。下句の「ふぶくゆうべとなりけるかも」では吹雪で川原が真っ白くなった景色が見えてくる。これを「吹雪く夕べとなりけるかも」としたら、漢字に気をとられすぎてしまう。画面の余白がそれだけ少なくなってしまう。

（大い）
本を読むとき、私は傍線をひいたり2、3行を丸で囲んだり欄外や余白に書込みをしたりする。見開き2ページをぱっと開いたとき、ページによってこの傍線の長短、丸、書込みの数と位置が活字や余白と見事なバランスをとることがある。これを私は勝手に読書の構図といっている。これは一冊を読み終えたときの話で、始めから構図を考えながら読むことがある。小林秀雄を読むときが、そうである。未だにこの人の文章はすらすらは読めない。傍線を引きたくなる個所が多いからである。うっかりすると、5行も10行も線を引く羽目になる。1ページ見開きに構図を考えながら丸を描き線を引き、書込みをする。

（描い）
（下キ）
引きたい場所にやたらに引かず、繰返し読みすすみながらパッと丸をつけたり、余白に着想を丁寧に描込むのである。この人は、そうせざるを得ない文章の達人である。

エンターテインメントの場合は、いっさい構図などは考慮しない。

—（平成14・02・14）—

（平成14・6・）